

吉備国際大学研究紀要
(人文・社会科学系)
第27号, 177-188, 2017

岡山県小学校における体づくり運動の実施に関する一考察

高田 康史*・筒井 愛知**

A Study on Contents of Physical Fitness in Elementary School of Okayama Prefecture

Yasufumi TAKATA, Yoshitomo TSUSTUI

Abstract

In this study, we investigated actual condition of Physical Fitness at elementary school in Okayama Prefecture. The purpose of this study is to get the basic data for the lesson of the body Physical Fitness. On the basis of these results, current status and problems of Physical Fitness at elementary school was discussed.

Key words : Physical Fitness, Physical education in Elementary School

キーワード : 体づくり運動、小学校体育科

1. はじめに

小学校体育科における体づくり運動は、高学年の体力を高める運動、中学年の多様な動きをつくる運動、低学年の多様な動きをつくる運動遊び及び、全学年共通の体ほぐしの運動からなっている。体づくり運動の変遷を概観すると、小学校学習指導要領の平成10年度の改訂では、小学校高学年のみにおいて「体操」領域

に加えて、体ほぐしの運動の内容が導入され、名称が体づくり運動と変更になった。また、低学年及び中学年においては平成20年の改訂より設定された。低学年及び中学年に多様な動きをつくる運動(遊び)が導入された理由については「(体づくり運動の)一層の充実が必要であることから、すべての学年において発達の段階に応じた指導内容を取り上げ指導するもの」(文

* (著者1所属) 吉備国際大学心理学部
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8
Kibi International University
8, Iga-machi Takahashi, Okayama, Japan (716-8508)

** (著者2所属) 就実大学人文科学部 非常勤講師
〒703-8516 岡山県岡山市中区西川原1丁目6-1
Shujitsu University
6-1, 1-choume, Nishigawara, Nakaku Okayamashi, Okayama, Japan (703-8516)

部科学省HPより)と示されている。また、「学習したことを家庭などで生かすことができるよう指導の在り方を改善する。また、体づくり運動以外の領域においても、学習した結果としてより一層の体力の向上を図ることができるよう指導の在り方を改善する」(文部科学省HPより)とも示され、他領域や家庭での遊び・運動とのつながりが強調されている。

小学校現場における体づくり運動の実施実態についての先行研究は渡部(2014)深谷(2016)などが存在し、以下の知見が得られている。1:体づくり運動の重要性はほとんど全ての教員が認識している。2:単独の単元として実施している教員は半数に満たない状況である。3:大半の教員が体づくり運動を授業のウォーミングアップとして実施しており、体づくり運動を単独の単元として実施しにくいと感じている。4:単元として活用しない理由は、児童の飽きを危惧すること、教員のノウハウのなさである。5:体づくり運動の講習会への参加率は20~40%程度であるが、参加希望については80%を超えている。先行研究はいずれ中部地方で行われた実態調査である。

そこで、本研究においては、岡山県に所在する小学校における体育科での体づくり運動の取り扱いに関する実態を調査することで、体づくり運動の指導及び教員研修などにおける基礎資料を得ることを目的とし研究を行う。なお、本研究では、先行研究を踏まえ、研究の独自性を担保するために教員歴に着目して分析及び検討を行っている。

2. 研究方法

(1) 研究対象

岡山県公立小学校に勤務する教員(10校, 84名)

(2) 調査対象の属性

調査対象の属性を表1に示す。調査対象は84名員であり、教員歴別に分類すると、若手(教員歴4年まで)23名、中堅(教員歴5年~19年)36名、ベテラン(教員歴20年以上)25名であった。

(3) 調査方法及び有効回答

質問紙調査法により調査を行った。調査後に回収した回答の中から、回答欄に未記入・無回答があるものについては無効回答とし、残りを有効回答とした。

(4) 質問項目

質問項目は、表2の通りである。

(5) 分析方法

1) 各項目に対する分析方法

分析に際しては、項目1、2、5については、単純集計を行った。項目3については、平均値及び最大値、最小値を算出した。項目6~19については集計を行ったのちに χ^2 検定を行い、有意差がみられたものには多重比較を行った。なお、処理に関しては全てMicrosoft Excel 2007を使用した。

2) 実施内容に関する自由記述の分析方法

項目4の実施内容については、記述内容をもとに筆者らによってその運動教材が学習指導要領でのどの内容に当たるかを精査し分類を行った。なお、教員が原文に「ボール(体ほぐしの運動)」などと記載している場合は、原文通りの分類を優先して分類を行っている。

表1 教員の属性(人)

	人数
全体	84
若手教員(教員歴4年まで)	23
中堅(教員歴5年~19年)	36
ベテラン(教員歴20年以上)	25

表2 質問紙調査における質問項目

実施内容	質問項目	
実態調査	項目1	教員歴及び担任学年
	項目2	体育授業の取り扱いについて（選択式）
	項目3	体づくり運動の単元配当時間（項目2で単元として行っていると回答した教員のみ）
	項目4	体づくり運動の単元における実施内容（自由記述）
	項目5	体づくり運動を他の領域のウォームアップとして行う理由 （選択式，項目2で他の領域のウォームアップとして行っていると回答した教員のみ）
意識調査	体力を高める運動（多様な動きをつくる運動（遊び））について	
	項目6	指導内容の理解度（5件法）
	項目7	指導への自信（5件法）
	項目8	資料の豊富さ（5件法）
	項目9	領域の必要性（5件法）
	項目10	評価の容易さ（5件法）
	項目11	研修の受講経験（2択式）
	項目12	研修の受講希望（2択式）
	体ほぐしの運動について	
	項目13	指導内容の理解度（5件法）
	項目14	指導への自信（5件法）
	項目15	資料の豊富さ（5件法）
	項目16	領域の必要性（5件法）
	項目17	評価の容易さ（5件法）
	項目18	研修の受講経験（2択式）
	項目19	研修の受講希望（2択式）

3. 結果及び考察

(1) 体育科における体づくり運動の授業の取り扱い

教員の体育科における体づくり運動の取り扱いについて記入したものを表3に示す。

体育科の授業の中で体づくり運動の領域を、「単元」もしくは「単元+他領域のウォームアップ・導入」として取り扱っている割合は全体では23.81%であり、教員歴別では、若手21.74%、中堅30.56%、ベテラン16.0%であった。また、「他領域のウォームアップ・導入」としてのみ取り扱っている割合は、全体では72.62%であり、教員歴別では、若手78.26%、中堅61.11%、ベテラン84.11%であった。また、「まったく実施していない」教員の割合は、全体では2.38%であった。

以上より、体づくり運動の領域は教員歴にかかわらず7割以上の教員が「他領域のウォームアップ・導入」として捉えており、「単元」を組んで実施している教員

は2割程度であることが明らかとなった。体づくり運動の体育科での取り扱いとしては、文部科学省による学校体育実技指導資料第7集体づくり運動-授業の考え方と進め方-（以下指導資料）によれば、「中学校及び高等学校では体づくり運動に配当する時間が解説に明示されましたが、小学校では明示されていません。しかし、学習内容の定着を図るためには、児童や各学校の実態を踏まえながらある程度のまとまった時間を位置付けることが必要です。」と示されている。中学校以降の発達段階のみならず小学校段階においても単元やまとまった時間数での指導が推奨されていると考えられるが、多くの学校ではまとまった時間を確保できない可能性が高いと考えられる。また、深谷ら（2016）の小学校教員を対象とした意識調査において「『体づくり運動』は単独の単元としてやりやすい」という設問に対し、78.31%の教員が「あまりそう思わない」「そ

表3 体育科における体づくり運動の取り扱い（教員歴別）

	単元	単元＋ ウォームアップ	ウォームアップ	行っていない	その他	合計
全体	15	5	61	2	1	84
	17.86%	5.95%	72.62%	2.38%	1.19%	1%
若手	3	2	18	0	0	23
	13.04%	8.70%	78.26%	0%	0%	100%
中堅	8	3	22	2	1	36
	22.22%	8.33%	61.11%	5.56%	2.78%	1%
ベテラン	4	0	21	0	0	25
	16.0%	0%	84.0%	0%	0%	1%

表4 体づくり運動の配当時間

	体づくり運動	内 訳	体力を高める運動 多様な動きをつくる運動（遊び）	体ほぐしの運動
			平均値	9.16
最大値	19		15	8
最小値	2		1	0

う思わない」と否定的な回答が多かったことを報告しており、本研究もこれを支持する結果であったことから、この現状は本県のみではなく日本全国で同様の現状があると考えられる。

(2) 体づくり運動の単元の配当時間について

体づくり運動を単元として取り上げた際の、年間の単元の配当時間と体力を高める運動（多様な動きをつくる運動（遊び））及び体ほぐしの運動のそれぞれの配当時間をまとめた結果を表4に示す。

体づくり運動の配当時間は平均9.16時間であり、最大値は19時間、最小値は2時間であった。そのうち体力を高める運動（多様な動きをつくる運動（遊び））にあてた平均時間は6.61時間、最大値は15時間、最小値は1時間であった。体ほぐしの運動については、平均時間は2.55時間、最大値は8時間、最小値は0時間であった。

以上より、単元配当時間にはばらつきが見られることが明らかとなった。年間19時間の時間数をかけて行っ

ている単元がある一方で、2時間しか取り扱っていない単元も存在するといった状況であり、教員によって体づくり運動の単元の取り扱いは大きく異なると考えられる。指導資料によれば「年間指導計画の検討に際して、小学校では、低・中学年の体ほぐしの運動及び多様な動きを高める運動（遊び）に配当される時間では、基本的な動きを体験することが中心となることから、ある程度まとまった時間数を各学期に位置づけるなどの配当が考えられます。」「高学年以降の体ほぐしの運動と体力を高める運動の位置付けについては、他の運動領域の準備運動や補強運動として、単元の導入時などに少ない時間を帯のように位置付けるのではなく」と、一定の時間数を確保することが推奨されており、少なすぎる時間数ではその成果を保証することは難しいと考えられる。そのため、現場教員及び教員志望学生には、体づくり運動の内容のみならずその取り扱い時間数や意義についても周知していく必要があるといえる。

表5 体づくり運動を他の領域で扱う理由（教員歴別）

	興味関心が ない	他の領域を 優先	時間数の 不足	評価の 難しさ	文献資料の 不足	下位教材 である	単元の不要	毎回の 授業で有効	その他
全体	0 0%	30 49.18%	4 6.56%	8 13.11%	4 6.56%	3 4.92%	1 1.64%	44 72.13%	6 9.84%
若手	0 0%	13 72.22%	1 5.56%	2 11.11%	2 11.11%	0 0%	0 0%	11 61.11%	4 22.22%
中堅	0 0%	7 31.82%	1 4.55%	5 22.73%	1 4.55%	2 9.09%	0 0%	18 81.82%	2 9.09%
ベテラン	0 0%	10 47.62%	2 9.52%	1 4.76%	1 4.76%	1 4.76%	1 4.76%	15 71.43%	0 0%

(3)体づくり運動を他領域で行う理由

体育科の授業の中で体づくり運動の領域の運動教材を、「他領域のウォームアップ・導入」として取り扱っている教員に対してその理由を選択肢から回答させた結果について記したものを表5に示す。

表5より体づくり運動を他領域のウォームアップや導入として位置付けている理由として最も多く選択されたものが、体づくり運動の内容が「毎回授業で有効」という選択肢であった（全体72.13%、若手61.11%、中堅81.82%、ベテラン71.43%）。また、次点に多く選択されたのは「他の領域にあてる時間を優先させる」という選択肢であった（全体49.18%、若手72.22%、中堅31.82%、ベテラン47.62%）。また他の選択肢については、全体として2割の選択率を超えるものはなかった。

以上より、体づくり運動を他領域で行っているとす理由は、教員が体づくり運動の内容は毎回の授業で有効な運動教材や内容であると捉えているためであるといえる。これと同時に、他の領域より優先度は低く捉えられている傾向にあるといえ、とりわけ、若手教員に至ってはこの傾向がより強いといえる。

(4)体づくり運動の実施内容について

体づくり運動の領域における実施内容をまとめたものを表6に示す。

1) 低・中学年での多様な動きをつくる運動（遊び）の

実施内容について

低・中学年での多様な動きをつくる運動（遊び）実施内容として多くの実践例が挙げたものを以下に示す。体のバランスをとる運動（遊び）では、「バランス遊び」、体を移動する運動（遊び）では、「ネコとネズミ」、「動物遊び」、用具を操作する運動（遊び）では、「フープ」「ボール」「縄」、力試しの運動（遊び）では、「手押し車」との記載が例として多く挙げた。

以上より、本研究調査からは低・中学年における多様な動きをつくる運動（遊び）の内容について、一見して様々な種類の運動が満遍なく行われていると捉えることができる。しかしながら、本調査からは学校現場での実施内容における不十分さを垣間みることができる。体を移動する運動（遊び）を例に挙げると、そのねらいは「いろいろな速さやリズム・方向で、這う、歩く、走る、跳ぶ、はねるなど」（徳永，2009）によって体を移動する多様な動きを身につけることである。本研究調査における体を移動する運動（遊び）の実践例で最も行われている「ネコとネズミ」（5件）を例に挙げると、その運動動作は“走る”を基本としている可能性が高い。また、実践例のうち、“這う”動作を伴うと考えられるものは、「動物遊び」のみである。教師が体を移動する運動（遊び）を実施する際は、そのねらいを捉えて多様な運動動作、即ち、“這う、歩く、走る、跳ぶ、はねる”を伴う教材を児童に提示すべきであり、単元内で動きの偏りがないように適切に配置する視点

が必要ではないかと考えられる。また、「ネコとネズミ」を取り扱うとしても、1回目は“走る”2回目は“這う”3回目は“ケンケン”など同じ遊びにおいても様々なバリエーションを加えていくことも工夫として考えられる。いずれにせよ、多様な動きをつくる運動（遊び）については、体力を高めることを直接の目的としない発達段階において、体の基本的な動きを培っておくことから規定されたため、実施内容の偏りが危惧されることのないよう、教員及び学校単位で単元計画及び年間計画、2年間に渡った体づくりの実施計画を検討する必要があるといえる。

2) 高学年の体力を高める運動の実施内容について

高学年の体力を高める運動では、巧みな動きを高めるための運動遊びに関する実践例が最も多く挙がっており、動きを持続する能力を高めるための運動や動きの柔らかさを高めるための運動における実践例は相対的に少なかった。指導資料においては「(小学校5・6年生は) 発達の段階を考慮し、『体の柔らかさや巧みな動きを高めるための運動』にやや重点を置いて指導します。」と示されている。このことを鑑みれば、体の柔らかさを高めるための運動については、本調査からはその実践が不足していると考えられる。体の柔らかさを高めるための運動については、本研究調査で実践例として上がった「ストレッチ」や体ほぐしの運動の例で挙げられた「ペアストレッチ」の他にも、「じゃんけん開脚」や「ピンセットリレー」などの競争や回数を競い合い仲間と楽しみながら柔軟性を高めることのできる教材も関連文献には紹介されている（「体育科教育別冊23 2009.10新学習指導要領準拠 新しい体づくり運動の授業づくり」、「すぐ使える『体づくり運動』活動例集」）。教員はこのような競争・回数を競うなどの要素を含む教材も積極的に利用しながら、授業を構成することでより充実した運動教材を児童に提供することができると考えられる。

3) 体ほぐしの運動の実施内容について

体ほぐし運動の内容としては、「ペアストレッチ」や

「新聞紙」「大根抜き」などが例として多く挙げられた。

体ほぐしの運動は、「気づき」「調整」「交流」をキーワードとして展開される領域である。本研究では、その実施内容もさることながら、前項で示した配当時間にも着目したい。体ほぐしの運動への配当時間は最小で0時間であり、平均値も体力を高める運動（多様な動きをつくる運動（遊び））の6.61時間に比べて2.55時間と4時間もの開きがあった。体ほぐしの運動は、指導資料において「運動経験の有無が影響することなく誰もが楽しめる手軽な運動や律動的な運動を通して、運動の得手不得手を越えて、仲間と運動を楽しんだり協力して運動課題を達成したりしていくことができます。」とされており、運動を苦手とすると考えられる児童に運動の楽しさや仲間との協調、自信の心と体の解放を目指すための有意義な領域であるといえる。子どもの体力が2極化しているとされる現状を顧みるとこの領域の内容の充実が期待されるが、学校によっては体づくり運動は実施していてもその中で体ほぐし運動は実施していない学校も存在することが明らかとなった。偏った見方をすれば、学校現場では、体ほぐしの運動の領域が軽視されている傾向があるとも捉えることができるため、この現状は危惧されるべきである。

表6 体づくり運動の実施内容

多様な動きをつくる運動（遊び）			体力を高める運動			体ほぐしの運動		
体のバランスをとる運動（遊び）	バランス遊び	5	巧みな動きを高めるための運動	輪を使って	1	ペアストレッチ	6	
	トンネルくぐり	1		縄跳び	1	新聞紙	3	
	平均台	1		棒を使って	1	大根抜き	2	
体を移動する運動（遊び）	ネコとネズミ	5		タイヤとび	1	風船	1	
	動物遊び	5		ダブルダッチ	1	ボール	1	
	馬跳び	1		バスケットボールシュートゲーム	1	フープ	1	
	ペース走	1		リズムジャンプ	1	ペアで手をつなぐ	1	
	ペア鬼ごっこ	1		5人6脚	1	風船はこび	1	
	横とび	1		力強い動きを高めるための運動	相撲遊び	2	フラフープ	1
	スキップ	1			手押し車	1	トンネルくぐり	1
	全力疾走	1	腕立てじゃんけん		1	手押し相撲	1	
	足うち	1	のぼり棒		1	せーので立つ	1	
用具を操作する運動（遊び）	輪（フープ）を使って	7	動きを持続する能力を高めるための運動		サーキット走	1	線ふみ鬼ごっこ	1
	ボール運び	6	体の柔らかさを高める運動		3～7分間走	1	体じゃんけん	1
	縄跳び	3		ストレッチ	3	開脚じゃんけん	1	
	長縄跳び	2	力試しの運動（遊び）	手押し車	6	大根のつけものづくり	1	
	ボールを使って	2		力試しの遊び	2	ストレッチ体操	1	
	縄を使って	1		手押し車じゃんけん	2	足踏みじゃんけん	1	
	棒を使って	1		おんぶじゃんけん	1			
相撲遊び	1	お相撲体操	1					
人運び	1							

(5)体力を高める運動(多様な動きをつくる運動(遊び))及び体ほぐし運動に対する意識

体力を高める運動(多様な動きをつくる運動(遊び))及び体ほぐし運動に対する意識調査の結果を表7に示す。

1)教員全体の体づくり運動に関する意識

教員全体の結果において、体力を高める運動(多様な動きをつくる運動(遊び))においては、「領域の必要性」に関する項目の値が最も高く4.13点であった一方、指導の自身(2.56点)、評価の容易さ(2.49点)は相対的に低い値を示していた。体ほぐしの運動に関しても同様に、「領域の必要性」に関する項目の値が最も高く4.19点であった一方、指導の自身(2.73点)、評価の容易さ(2.32点)は相対的に低い値を示していた。

以上より、いずれの領域においても領域の必要性に関する項目への値が高かったことから、教員は体づくり運動の各領域の必要性を高く認識していると考えら

れる。一方で、指導の自信や評価に対する項目が、5件法中央値の2.5点前後であったことから、教員は指導やその評価に関しては全体的に自信を持つまでにはいたっていない状態であると考えられる。

2)教員歴に着目した比較について

教員歴による意識の違いに着目したところ、体力を高める運動(多様な動きをつくる運動(遊び))においては「指導内容の理解」の項目で若手が相対的に低い値(2.48点)であり、中堅(3.33点)では1%、ベテラン(3.20点)5%の有意差を示した。「指導の自信」も同様に若手が相対的に低い値(2.00点)であり、中堅(2.78点)ベテラン(2.76点)ともに1%の有意差を示した。「資料の豊富さ」の項目については、若手が(2.26点)が、ベテラン(3.00点)に1%の有意差を示した。

以上より、若手は中堅・ベテランに比べて相対的に指導に対する自信が低いといえる。教員全体においても「指導に対する自信」は他の項目と比較して低い値

表7 体づくり運動に対する意識調査（教員歴別）

体力を高める運動（多様な動きをつくる運動（遊び）について

	指導内容の理解	指導への自信	資料の豊富さ	領域の必要性	評価の容易さ	多重比較
全体	3.06	2.56	2.70	4.13	2.49	指導内容の理解 若手<中堅** 若手<ベテラン* 指導への自信 若手<中堅** 若手<ベテラン** 資料の豊富さ 若手<中堅**
若手	2.48	2.00	2.26	4.22	2.26	
中堅	3.33	2.78	3.00	4.17	2.39	
ベテラン	3.20	2.76	2.68	4.00	2.84	

*p<0.05 **p<0.01

体ほぐしの運動について

	指導内容の理解	指導への自信	資料の豊富さ	領域の必要性	評価の容易さ	多重比較
全体	3.15	2.73	2.88	4.19	2.32	指導への自信 若手<ベテラン**
若手	2.78	2.26	2.43	4.39	2.13	
中堅	3.31	2.81	3.03	4.17	2.31	
ベテラン	3.28	3.04	3.08	4.04	2.52	

*p<0.05 **p<0.01

であったため、体づくり運動に対する若手の指導の自信の低さは特筆すべきであるといえる。この数値の低さは教員歴の浅さに起因するものであるのか領域の特性であるかは本研究からは判断できない。しかしながら、若手教員は体づくり運動についていずれの領域の指導に対しても不安を持つ傾向にあると考えられるため、教員養成系の大学では、講義・演習内での模擬授業等の充実や課外での指導に更なる充実を図り、この領域の指導に対して自信を持てる段階まで教育する必要があるといえる。また体力を高める運動（多様な動きをつくる運動（遊び））に関して、若手教員は資料の少なさを感じ、指導内容を理解しきれていない傾向にあると考えられる。教員養成系大学の大学生のみならず若手教員に対しても、教員研修等において参考となる資料の提示やその検索方法を示す必要があるといえ、また同時に資料を読み解く力などについても育成していく必要があると考えられる。

(6)研修の受講経験及び研修への参加意思について

体力を高める運動（多様な動きをつくる運動（遊び））及び体ほぐし運動に対する研修の受講経験及び研修への参加意思についての結果を表8に示す。

教員全体で、研修の受講経験があるものは、体力

を高める運動（多様な動きをつくる運動（遊び））は35.71%、体ほぐしの運動については54.76%であった。また、研修を受講したいという教員の割合は、体力を高める運動（多様な動きをつくる運動（遊び））は88.10%、体ほぐしの運動については84.51%であった。教員歴に着目した経験・意識の違いについては、体力を高める運動（多様な動きをつくる運動（遊び））において、中堅とベテランにのみ有意差が見られたものの他の群間では有意な差はみられなかった。

以上より、教員は教員歴にかかわらず体づくり運動の各領域の研修受講経験に大差はないといえる。また、研修があれば受講したいという教員の割合は、いずれの領域においてもその割合が80%を越えていた。このことより教員は、体づくり運動の領域について経験不足や知識不足を認識し、より良い授業のために研修の受講を希望しているものが多いことがわかる。これは、先行研究においても同様であり、体づくり運動の講習会の受講率は、深谷ら（2016）の先行研究では24.1%、渡部（2014）の先行研究では43.2%であった。また、講習会に参加したい教員は81.9%（深谷ら,2016）であった。この内容についても、全国的に同様な傾向であると考えられる。

表8 研修の受講経験及び受講希望について（教員歴別）

体力を高める運動（多様な動きをつくる運動（遊び））について

研修受講経験はありますか				研修を受けたいですか			
	はい	いいえ	多重比較		はい	いいえ	多重比較
全体	35.71%	64.29%	n. s.	全体	88.10%	11.90%	中堅>ベテラン*
若手	21.74%	78.26%		若手	95.65%	4.35%	
中堅	44.44%	55.56%		中堅	94.44%	5.56%	
ベテラン	36.00%	64.00%		ベテラン	72.00%	28.00%	

*p<0.05

体ほぐしの運動について

研修受講経験はありますか				研修を受けたいですか			
	はい	いいえ	多重比較		はい	いいえ	多重比較
全体	54.76%	45.24%	n. s.	全体	84.52%	15.48%	n. s.
若手	47.83%	52.17%		若手	91.30%	8.70%	
中堅	58.33%	41.67%		中堅	88.89%	11.11%	
ベテラン	56.00%	44.00%		ベテラン	72.00%	28.00%	

(7)小括

本研究における調査結果から、学校現場での体づくり運動に関する教員の知識不足や共通認識の欠如がある可能性が示唆された。単元及びまとまった時間数での指導を行っている割合が少ないことや、実施内容の偏りや不足の可能性が危惧されることなどがこれらを表しているといえる。また、本研究では、体づくり運動を、体力を高める運動（多様な動きをつくる運動（遊び））及び体ほぐし運動の2つに分けて調査し分析及び考察を行ったが、教員の意識や研修の受講経験及び研修の参加意思については、いずれの領域にも差はなく概ね同様な結果であったといえる。つまり、教員は体づくり運動全般において、指導の自信や評価について不安を感じているものが多く、研修の参加を希望している教員も多いと考えられる。また、若手教員は、中堅・ベテランと比較して指導そのものの自信に加えて資料の不足を感じている。資料の不足感に関しては、若手教員が資料の入手方法や検索方法を熟知していないことも関連するとも考えられるため、教員養成系大学での学生の指導力育成はもちろんのこと資料の入手・検索方法も指導していかなければならない。

また、体づくり運動を児童に有益な領域とするため

には領域の特性をいかした単元の工夫が必要であると考えられる。主な単元例を下記に示す。学校現場で参考となりうる2パターンの単元を提示する。1つ目の単元参考事例は、動きを工夫し広げ深める単元計画である。文部科学省作成の「多様な動きをつくる運動（遊び）パンフレット」には、「動きを確認しながら運動する時間」を前に「動きを選び、工夫しながら運動する時間」を後ろに設定している。また、杉本（2010）も同様に、体づくり運動の単元について低学年を例に挙げ、7時間で1単元の計画を紹介している。2つ目の単元参考事例は、組み合わせ単元である。名古屋市体育研究会（2011）では、体づくり運動の単元の組み方として単独で単元とする「単独単元」と、他領域と組み合わせる「組み合わせ単元」を紹介している。「単独単元」では、体力向上や知識・技能の習得について短期間で大きなものが期待できていることに対し、「組み合わせ単元」では、他の単元の学習との相乗効果が期待できるとしている。

体づくり運動において教員は、児童にとって魅力のある学習内容を用意し運動の質のみならず量を確保することや、結果として体力の向上や基本的な動きを動き培うことにつながったり友だちとの豊富なコミュニ

ケーションやかかわりを生み出したりすることを成功裡に仕組んでいく必要があると考えられる。その中で、児童の実態を踏まえながら、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎をこの領域で児童に身につけさせなければならない。

4. まとめ

本研究において、岡山県公立小学校に勤務する教員84名に体づくり運動に関する実態調査を行った結果を以下に簡潔にまとめる。

- ① 体づくり運動を単元として実施している教員は2割程度であり、7割を超える教員は他の領域のウォームアップとしてこの領域を取り扱っている。
- ② 単元の年間配当時間は最低2時間、最高19時間、平均9.16時間であり、その取り扱いにばらつきがみられる。
- ③ 教員が他の領域のウォームアップとして体づくり運動を捉えている理由は、毎回の授業で有効であると考えられていることに加えて、体づくり運動が他の領域より優先度が低く捉えられていることである。
- ④ 体づくり運動の実施内容には、偏りや不十分さがある可能性が示唆される。
- ⑤ 体づくり運動の指導については、教員歴に関係なく不安を覚えている教員が多いと考えられる。

とりわけ、若手教員は中堅・ベテランの教員に比べて指導により不安を覚えているとともに資料の不足も感じている。

- ⑥ 80%の教員が体づくり運動の研修の受講を希望している。

以上より、学校現場での教員は体づくり運動の領域に関して指導の自信が乏しく、教員間の指導内容に偏りがあることも想定される。また、教員は自信の指導力向上のための研修の機会を欲していると考えられる。これは、体育科における他の領域は素材となるスポーツや運動を元にして教材化されたものが多いことに対して、体づくり運動の領域には明確な素材を社会体育において見いだすことが難しいため、学校現場での共通認識やゴールイメージが形成されにくいことが一因ではないかと考えられる。しかしながら、体力2極化の現状や子どもの運動・スポーツに対する可能性を広げるためにも体づくり運動の領域の発展や実践のさらなる広がりが必要不可欠であるといえるため、研修などを通して領域の考え方や内容に関する普及をより行う必要があるといえる。

謝辞

本研究での調査にご協力いただいた教員の皆さま及び関係諸機関に対してこの場をお借りいたしまして深く謝意を表します。

引用文献・参考文献

- 1) 文部科学省HP 体育科・保健体育科の現状と課題、改善の方向性（検討素案）
（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/07091203/002.htm H29.1.5現在）
- 2) 渡部琢也（2014）体育科教育における体づくり運動の現状について，名古屋経営短期大学紀要，55，13-22.
- 3) 深谷 秀次・早川 健太郎・渡部 琢也（2016）小学校における「体づくり運動」の現状，子ども学研究論集，8，5-20.
- 4) 文部科学省（2013）学校体育実技指導資料第7集体づくり運動-授業の考え方と進め方-，東洋館出版.
- 5) 高橋健夫・小沢治夫・松本格之祐・長谷川聖修（2009）体育科教育別冊23 2009.10新学習指導要領準拠 新しい体づくり運動の授業づくり，大修館書店.
- 6) 名古屋市体育研究会（2011）すぐ使える！「体づくり運動」活動事例集，明治図書.
- 7) 杉本真智子（2010）「多様な動きをつくる運動（遊び）」の考え方と進め方，よくわかる「体づくり運動」の授業づくり，池田延行・村田芳子編，12-13.

